

『国際法以後』を見据える感性と理性

根岸陽太（西南学院大学）

今回の講演会で取り上げられた最上敏樹先生著『国際法以後』は、研究者としての矜持を感じる重厚な一冊になっている。「いわゆる国際法学者向けに書かれた本ではない」とあるように、術学的な専門用語は極力避けられているが、だからといって「知的な活動とは無縁な、読書さえも縁遠い人を想定してはない」（あとがき）。手に取った読者は、現実を見据えた明晰な記述と、それを見通すための理論の深淵さに、圧倒されることが多いと予想する。ただ、本書から発せられる気迫は、先生の練り上げられた理知によることはもちろんであるが、より深いところから湧き上がってくるかのようである。

その力の淵源はどこにあるか。今回の講演会で最上先生は、その問いに一つの写真を投影して説明された。それは、シリア内戦で家を破壊された家族の写真で、5歳の女の子が生後7ヶ月の妹を助けるために身を乗り出していた姿を捉えたものである。この写真の記憶が鮮明に浮かび上がってきたのは、国際法のメッカとも言えるハーグで、一流の国際法律家の報告を聞いていた最中だという。安全な場所で高邁な国際法の理念がお偉方から説かれる一方で、地獄のような戦場で弱者に無慈悲に迫る現実、そのずれが最上先生をして本書に取り組ませる要因になったようだ。

本書を執筆されているとき、最上先生の心には常に彼女たちの無念があったに違いない。その写真の姿をまなざすことは、本書を軽薄なセンチメンタリズムで満たすことを意味しない。むしろ、「他者への共感を根源にすえた、社会科学的な感性」というものにⁱ⁾、国際法学がこれまで本気で向き合ってきたことがこなかったことに気づかせてくれる。『国際法以後』は、「理論にだけできること」（第7章）を模索する書であると同時に、「感性がなければできないこと」を読者に訴えかける場でもある。

今回の講演会で登壇されたコメンテーターの方々は、それぞれの専門的な知見から、このような感性と理性の融合を体現していた。小坂田さんは国際法がその出自から原罪として抱えている先住民族の排除に向き合い、小栗さんは主流の理論が排除の政治をもたらしてきた国際法理論史を紐解き、葛谷さんからは同様の問題を抱える国際政治思想の反省を共有された。このような分野横断的な視点を指針に、今回の講演会に参加された方々を中心に、幅広く『国際法以後』が読まれ続けていくことで、本書が見据える「来るべき」国際法の像が朧げに見えてくることだろう。

i 最上敏樹「がれきの下の理想」『未来の余白からII——穏やかな時間 感謝のとき』（婦人之友社、2021年）参照

ii 最上敏樹「〔この美しい世界の片隅で1〕世界の美しさへのまなざし」『UP（東京大学）』41巻11号（2012年）。